

郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

下着メーカー・ワコール創業者の塚本幸一は仙台出身であった

仙台市民図書館郷土資料担当 渡邊 啓市

女性下着メーカーの「ワコール」という会社はよく知られていると思いますが、その創業者の塚本幸一の名前はご存じでしょうか。彼は、滋賀県の近江商人の中でも名門として知られる塚本家の血を引く経営者で、1920(大正9)年9月17日、仙台市花壇川前町(現在の青葉区花壇)で生まれました。

両親は、ともに近江の出身。近江商人は様々な土地に進出しており、仙台もその一つでした。彼の生誕の際には、近所に住んでいた詩人の土井晩翠が幸一の誕生を祝して歌を詠んでくれています。

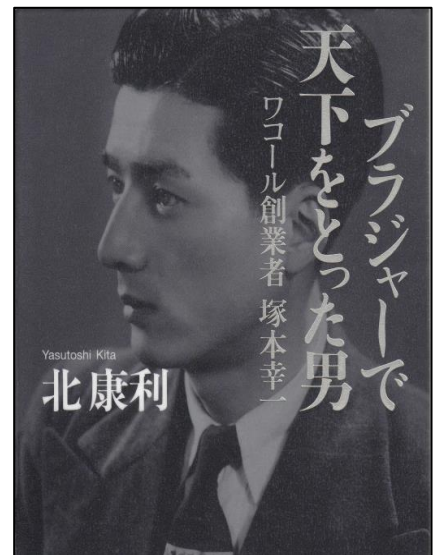
彼の本家筋である「塚本商店」は1889(明治22)年、仙台市大町(現在の青葉区大町)で創業。綿織物や麻織物を扱い、東北6県を商圏に収め、繊維の卸業者としてはこの地方の最大手となっていました。この店主は塚本仲右衛門。幸一の祖父、一代目桑次郎はその弟でした。

幸一の父、二代目桑次郎は、自身が5歳にも満たない時に両親がともに亡くなってしまったため、最初は近江八幡にあった母方の西川家(ふとんの西川)で育てられましたが、その後、本家の塚本仲右衛門に引き取られました。そして、同社に入社して9年目の年に、滋賀県の大地主で代々村長を務めていた岡田家の三女、信と結婚し、翌年、幸一が仙台で生まれたのでした。

幸一は、1927(昭和2)年、片平丁尋常小学校(現:片平丁小学校)に入学。しかし当時、ギャンブル好きであった父が「塚本商店」のお金を綿花などの先物相場につぎ込み大きな損害を出したため、両親ともども「塚本商店」から追い出された形となり、仙台を離れることになりました。

その後の彼は、近江八幡、京都と移り住み、滋賀県立八幡商業学校(日本初の公立商業学校で、現在の滋賀県立八幡商業高等学校。ジャーナリストの大宅壮一が“近江商人の士官学校”と呼んだ名門校)に進学。父母とともに、本家を見返したいとの思いを強く持ちながら、卒業後は父が京都で創業した「嘉納屋商店」で、社員として働くことになりました。

戦時中、兵役した幸一は、インパール作戦に従軍。所属部隊55人のうち生き残ったのは3人だけという悲惨なものでしたが、九死に一生を得て生還することができました。1946(昭和21)年、復員した幸一は京都の自宅に戻り、その日のうちにアクセサリー販売を行う「和江商事」を創業したのでした。



<参考図書>

『ブラジャーで天下をとった男』北康利／著 プレジデント社 289ツ

『塚本幸一 わが青春譜』塚本幸一／著 日本図書センター 289ツ

『乱にいて美を忘れず ワコール創業奮戦記』塚本幸一／著 東京新聞出版局 289ツ

■ある日のレファレンスから

前号のこのコーナーで、「宮城県知事公館」の建物が、かつて児童館として利用されていたことを取り上げましたが、その後、郷土資料コーナーをよく利用される方から情報提供があり、1858（昭和33）年1月26日付河北新報朝刊の県内版に「春から児童会館へ 生れ変わる旧師団長官舎」という見出しで、旧師団長官舎が児童会館になる予定であることが書かれていると教えていただきました。

その記事には、「約一千坪の庭園に児童遊園地を設け、建坪二百四十四坪の室内には図書室、総合的な郷土室、映画、幻灯などの設備がある視聴覚室、小グループの会議室等を造る。」と書かれています。当初は、「返還と同時にこの由緒の地を迎賓館にしたい計画だった。ところが、財政難から手が出せず」迎賓館の計画は白紙となったようです。結局、「外観は変わっていないが、内部はアメリカ式に改造されてしまっている」「公共施設であれば国有財産特別措置法によって払下価格が半額となり、さらに数年間の延納が認められる」などの点から、児童会館としてであればそのまま使用できるという判断で、払下げの申請に踏み切ったとありました。この記事には当時の建物の写真も掲載されていて、マイクロフィルムでご覧いただけますので、興味のある方は4階カウンターでお尋ねください。

■新着図書紹介（郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書）

『郷土ゆかりの人物総覧 出身県別4万人 新訂』

日外アソシエーツ株式会社／編集 日外アソシエーツ R281 キ

郷土にゆかりのある著名人を都道府県別に約4万6千人収録。古代から現代に至るまでの政治家、研究者、作家、芸術家、スポーツ選手、芸能人など幅広い分野の人物のデータブックとして、調べものに幅広く利用できる一冊です。

今回取り上げた「塚本幸一」も宮城県の人物の中に収められており、ページをめくれば地域の特徴や歴史をあらためて学ぶ手がかりともなります。また、巻末には人物索引が掲載されていて、気になる人物の出身地・ゆかりの地域を調べることもできます。



『私の・住んだ・街 Meine Sternzeit』

白井恵／著 プランニング・オフィス社 S72 ウ

著者が約40年前に留学した旧西ドイツでの3年間の暮らしを記した本で、イラストも、点の集まりや短いタッチで描く「点描」という手法で著者自身が描いています。白と黒のみで描かれた繊細な絵は、眺めていると行ったことのないドイツの風景が浮かんでくるから不思議です。

“時間を巻き戻せるものなら、何を捨ててもいいような気持ちを何かの加減で感じる”とまで想う著書がいうドイツとはどんなところなのか。文章やイラストを味わいながら、ゆっくりとページをめくって楽しんでほしい一冊です。



■編集後記■ 今年は東日本大震災の発生から15年目となる節目の年になります。震災時に生まれたこども達も4月から高校生。転勤などで震災後に仙台に来られた方もいらっしゃいますので、今後ますます震災を知らない仙台市民が多くなっていきます。当館では、震災の記憶や記録を後世に伝えるため、震災に関する書籍や新聞等のさまざまな資料を収集した震災文庫を設けていますが、今後も災害の記憶を忘れないよう、防災を含め震災関連の資料の充実と定期的な資料展示を行ってまいります。

発行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地：仙台市青葉区春日町2-1 せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585